

1930年代の北海道・東北地方における「らい予防デー」の研究*

— 北部保養院と中條資俊の検討を中心に —

平田 勝政**

A Study of “Leprosy Prevention Day” in the Hokkaido and Tohoku Region in the 1930s:
Focusing on Hokubu-hoyoin Sanatorium and Nakajo Suketoshi

Katsumasa HIRATA**

1. 研究の目的・方法・倫理的配慮

筆者は、これまでに、未解明な点の多い「無らい(県)運動」との関係性を視野に入れながら、1930年代の「らい(癩)予防デー」(1931年から1944年頃までの毎年6月25日)に注目したハンセン病社会事業(=救癩事業)の展開過程に関する一連の研究を行ってきた¹⁾。その研究は、①1920年代の希望社運動を前提とする1931年の希望社主催の「らい予防デー」の研究(拙稿:2013,2014,2015)、②中央のラジオ放送に注目した「らい予防デー」の研究(拙稿:2016a,2017)、③第一区~第五区の道府県立連合らい療養所の管轄区域別の「らい予防デー」の研究(拙稿:2018)、④台湾・朝鮮等の旧日本植民地における「らい予防デー」の研究(拙稿:2021)から構成されている。

本研究は、上記③の区域別研究課題の1つで、青森県にある北部保養院の管理区域の第二区(北海道・東北6県)における「癩予防デー」の成立・展開過程とその特徴を、欧米留学後から治療解放主義(=パロールシステムの導入)に賛意を表明していた北部保養院長の中條資俊(1872~1947)に注目して検討しようとするものである。そこで本文では、まず1920年代後半から顕著となる中條院長の治療解放主義の主張を再確認し、次に北部保養院(中條院長)における希望社運動の影響を解明する。その上で、第五区における「らい予防デー」を具体的に検討していく。分析対象は、①基本資料の『北部保養院(松丘保養園)統計年報』(1909~1944年)、②北部保養院の発行誌「甲田の裾」(1931~1944年)、③青森県の地方紙「東奥日報」を中心とする北海道・東北の地方新聞における「癩予防デー」関係記事などである。

なお、既に「癩」等の表記に見るように人権尊重の見地からすると不適切な用語が使用されているが、以下の文中においても歴史的用語として使用することをお断りしておく。

2. 中條資俊の治療解放主義とその言説の検討

中條資俊は、北部保養院(1941年の国立移管後は松丘保養園と改称)の初代院長(実質)として1909年から1947年の約40年の長きにわたり同院・同園を動くことなく、一カ所に根付いてその経営と患者治療に尽力し、「救癩」事業に生涯を捧げた稀有な人物である。その中條の評伝については、中條資俊伝刊行会編『中條資俊伝』(青森県救らい研究会発行、1983年)が刊行されており、中條の生涯と業績を知る上で大変貴重な先行研究文献である。しかし同書の「中條資俊年譜」に記載されている研究業績には、拙稿(2012)で言及したように中條の「救癩」観の特徴(=治療解放主義)を理解するうえで重要な業績(下記の(a)、さらに(c))が欠落している。以下では、1933年の癩予防協会主催の「らい予防デー」開始以前の段階における中條の治療解放主義の言説を、下記の(a)(b)(c)の論稿に注目しながら年代順に再検討していく。

(a)「欧米に於ける癩見聞記(一)~(八)」『医事公論』第672~679号(1925.5~7)

(b)『中條資俊伝』(152~155頁)に収録されて1931年の論文「皇太后陛下御誕辰の佳節に当り偲ばるる癩問題」

(c)巻頭言「癩根絶戦線望見」『日本公衆保健協会雑誌』第9巻第4号(1933年4月)

上記(a)は、欧米視察におけるハワイに関する

* Received September 30, 2022

** 鎮西学院大学現代社会学部社会福祉学科 Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

る見聞記である。中條は、欧米視察の記録（おそらく復命書）を「欧米に於ける癩見聞記（一）～（八）」と題して「医事公論」第672～679号（1925.5～7）に8回連載している。その8回中の5回分（四～八）を「布哇の現況」（1924.5～6布哇滞在）にあて、原田助を通訳とするディーン博士との面会、モロカイ島のカラウパバにある「癩セツルメント」やホノルルのカリヒ病院・各種ホームの視察、さらにハワイでの治療法とその実情を詳細に紹介している。特に最後（8回目）に「軽重患者区分取扱と誓約放免」というハワイのハンセン病政策に注目して日本（主に医学界）にその政策を紹介している。その要点は、①まず「誓約放免」に注目し、その定義を「最早病毒撒蔓の危険を、他に及ぼさずと認め得る治癒状態者」（＝「病勢休止、或は俗に『固まった』と呼ぶ状態）に対し、「一定条件の下に許可する仮退院の義なり」と説明し、②次に「治病的方面より見て、病症の軽重及び治癒状態者、並に全治と認むべき者を区分的に取扱ふは、最も理想的の措置として之が実現を希はざるを得ず」として「軽重患者区分取扱」に賛意を表明していることである。当時の第一区～第五区の療養所の院長職にあり、光田健輔と並ぶ斯界の重鎮であることを考えると、1925年時点での実地見聞に基づくハワイの解放（放免）政策に関する貴重な情報提供であったといえる。それは、中條自身への影響をも意味している。一方、光田は1922年に早くもそのハワイの解放政策を批判して、「軽快者を解放したるとせよ、然らば今後十年を待たずして、更に尚ほ多数の癩患者を発生するに至るべし」と述べ、反対していた（拙稿：2012）。中條と光田の「救癩観」の違いは明白と言える。

次に（b）の1931年論文「皇太后陛下御誕辰の佳節に当り偲ぶる癩問題」は、1931年6月25日に秋田県で開催された「癩病根絶期成同盟大会」（希望社主導の癩予防デー）での講演記録である。光田健輔（希望社の後藤静香と深い親交）ほどではないが、後述するように中條も皇室中心主義の希望社運動に関係していた。（b）の論文で中條は、「癩根絶の核心」は「根治療法の発見」にあり、「現時一程度の治療的効力を認め得る様になって居り」、また治療後再発せず自然治癒の事実も存在していることを考慮すると、「医療に依って全治を期待し得る時期に達したと言って宜しい」と述べている。隔離の必要性を認めつつも、ハンセン病問題の隔離主義的解決をめざす光

田とは異なって、「根治療法の発見」こそが重要という治療主義的解決の立場を堅持した主張が注目される。希望社が推進する「癩根絶」運動にも、光田と中條の考え方の違いが反映して、隔離主義と治療主義の相克が確認できる。

さらに（c）の巻頭言「癩根絶戦線望見」（1933年）では、強制隔離を可能とする「癩予防法」下において、中條は、「癩の隔離を開始して以来滿二十四年、其間…癩の治癒状態者を見た事は屡々で…其儘に隔離を持続する…之は癩予防の目的達成上、能率の増進上、人道上、経済上…、医学上の見地からして決して等閑に附すべき事でないと思ふ」として、①能率上、経済上からは「病毒伝播の危険なき者」を「解放」して「危険ある患者の隔離」を優先すべきこと、②人道上、医学上からは「癩治癒者を解放」することで、「病気の不治」という「世人」の「癩を不治と誤解する先入主の弊を脱」するように世間を変えていくこと、③さらに人道上から「癩治癒者」に「社会の扉を開く」ため、「保護機関」として「何等か斯種の機関を設置する」必要があることを提案している。「病毒伝播の危険のない治癒状態の隔離は根本の趣旨を没却する所為である」という中條の主張は、1931年制定の「癩予防法」に対する中條の理解をも示すもので、「癩患者にして病毒伝播の虞れある者」は隔離（強制隔離）の対象とはなるが、そうでない者は隔離の対象とはならないという解釈に基づいていると判断される。また隔離されても治療により「病毒伝播の虞れなき者」になれば解放される（退院できる）ことを意図していたと考えられる。「癩予防法」の解釈（理解の仕方）の違いによって、終生隔離生活の道か、治療に専念して軽快退院（社会復帰）への道か、入所者の意識と生活のあり方にも違いが生じ、社会の理解の仕方にも変化をもたらす可能性が秘められていたといえる。

3. 希望社運動と中條資俊

希望社の機関誌「希望社時報」等には北部保養院を拠点に中條が希望社運動の積極的な担い手であったことが確認できる。具体的に見ていくと、「希望社時報」第14号（1927.2.1）の青森県欄（7頁）に「北部保養院に中條院長あり」と紹介され、同22号（1927.10.1）には「特別会員」（＝誌友十名以上の紹介者）として青森県欄中に「中條賢俊」（賢は資の誤植？）の名があり、さらに同36号（1928.12.1）同37号（1929.1.1）、同38号

(1929.2.1) には3カ月連続で「倫理運動陣頭の勇士」(＝誌友普及員その他特別尽力者)の青森県欄に「中條資俊」の名がある。1928年10月から1929年1月にかけて北部保養院内で中條院長が率先して誌友拡大に尽力していたことが窺える。その誌友を中心に希望社特有の「相互修養会」が定例開催されていた。〈写真1〉はその様子を伝えるもので、「北部保養院に於ける相互修養会」との見出しの写真には、説明文として「癩患者を収容して居る青森県北部保養院では院長を始め患者の大多数が熱心な社友であり、毎月の行事として相互修養会を開いて居る」と記されている。「患者の大多数が熱心な社友」であることを反映して、北部保養院の発行誌「甲田の裾」の1931年11月号には希望社社主の後藤静香が「病める同胞に贈る言葉」(1931.9.4付)と題して寄稿している。後藤は、「人間には運命というものがあり(中略)何ともがいても人間の力で反抗し得ない運命はあるもの」とした上で、その「運命に対し人間のとる態度」には、①「運命に反抗する事」、②「運命を悲観する事」、③「運命を諦める事」、④「運命を利用する事」、⑤「運命を感謝する事」の「五つの態度」があるとし、「運命を感謝する。ここに至れば最上です」と述べて⑤の境地に到達することを提唱している。希望社事件で引退表明(1931.9.20)をする直前での「病める同胞」への「贈る言葉」は、隠遁(謹慎)先の長島愛生園(園長・光田健輔)でも語られたと思われる。今日でもハンセン病療養所の入所者の語りで耳にする「感謝党」という呼称の源泉に関係してくるものと考えられる²⁾。

〈写真1〉相互修養会(中央奥が中條院長)



出所)「希望の日本」第64号(1931.4.1)の7頁

4. 第二区(北海道・東北)における「癩予防デー」の成立・展開と救癩事業の特徴

(1)「東奥日報」における中條資俊の言説

地方紙「東奥日報」に注目すると、「癩予防デー(週間)」における中條資俊(北部保養院長)の言説(③は例外)には、下記のものがある。

- ①「癩問題に就て」(東奥日報1931.6.26～27付、以下日付のみ)
- ②「癩予防事業の将来に対する要望」(1932.6.25～26)
- ③「癩、必ずしも不治に非ず」(1936.9.8)
- ④「御仁慈に感激」(1937.6.29～30)
- ⑤「癩予防座談会」(1939.6.26)
- ⑥「癩は不治に非ず、今年すでに四名全治、中條北部保養院長の努力」(1940.6.30)
- ⑦「第二区救癩事業」(1941.6.24)

①では、「癩根絶の核心」は「根治療法の発見」にありとし(拙稿:2010)、②では、公立療養所の「国立移管」と患者の「症状別、重軽症別、治療状態者別」の収容・処遇を要望している。後者の症状別では、治療により「軽快乃至治癒状態に至れる者」は、「重症の放菌性患者」との「混淆収容」では逆に「再感染」の危険があるため、療養所からの「退院を許す」か、「世間」が危険視して受け入れないならば「保護的隔離の方法」として「農工業等生産的事業の奨励」を提起している。

③と⑥は治療(中條開発のTRと大風子油の交互作用＝リレー療法)の成果としての朗報で、③は貞明皇后にも伝えられている。⑥の4名全治退院(帰郷)の談話では、「癩は軽いうちから手当をすれば必ず治る病気です」と述べている。③の報道は「癩青年全快し、天晴れ甲種合格、中條博士の研究みごと奏効、“天刑、不治”を解消」(「台湾日日新報」1936.9.8付)との見出しで台湾にまで影響が及んでいる。

(2)北海道・東北における「癩予防デー」の変遷(時期区分試論)

これまでの筆者の研究成果(平田:2010,2014,2015,2016)に基づく表1・表2や『北部保養院(松丘保養園)統計年報』及び「甲田の裾」にみる「癩予防デー」の記述(表3・表4参照)をふまえて、第二区(北海道・東北)における「癩予防デー」に注目した救癩事業の展開過程を整理すると、次の4期に時期区分できる。

①第1期(1931～32):1931.6.25に開始された希望社主導の「癩予防デー」は、北海道・東北では札幌、小樽、函館、青森、秋田、福島などの各都市で取り組まれ、「癩病根絶期成同盟大会」の

表1 1930年代の「癩予防デー」におけるラジオ放送一覧

年月日	ラジオ放送の内容
1931.6.25	光田健輔、JOAK（東京）より「癩病の予防と根絶」を放送
1932.6.25	①三室戸敬光がJOAK（東京）より婦人講座として「国民の保健とらい病」と題するラジオ講演をおこなう。②三室戸のラジオ講演に2日先行して、6月23日にJOBK（大阪）より長島愛生園医官の林文雄によるラジオ講演「癩を救ふ三つの力」が放送される。
1933.6.25	山本達雄（内務大臣）が、AKより「癩の予防根絶」を講演
1934.6.25	潮恵之輔（内務次官）が、AKより「先づ根絶せねばならぬ病氣」を講演
1935.6.25	前日の24日に光田健輔が、JOKK（岡山）より全国中継で「癩問題に関する婦人の責務」を講演
1936.6.25	林芳信（全生病院長）が、AKより「癩の予防と社会的施設に就て」を講演
1937.6.25	挟間茂（内務省衛生局長）が、JOCK（名古屋）より全国中継で「癩予防施設に就て」を講演
1938.6.25	廣瀬久忠（厚生次官）が、AKより「癩予防日に際して」を講演
1939.6.25	①AKより、午後3時から宮崎松記（九州療養所長）が「癩予防と婦人の力」を講演。②午後（夜）に女優の田村秋子が物語「小島の春」（小川正子作・岸田國土編輯）を朗読
1940.6.25	①AKより、午前中に林芳信が「癩の知識」を講演。②午後（夜）に吉田茂（厚生大臣）が「癩予防事業に就て」を講演。都市放送が24・25日の2日連続で朗読「小島の春」を放送

（出典）拙稿（2016：63頁）より作成

表2 1930年代の第二区の「癩予防デー」におけるラジオ講演放送の掲載一覧

No.	道府県名	新聞名	一九三二年	一九三二年①	一九三二年②	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年①	一九三九年②	一九四〇年①	一九四〇年②
			光田健輔	林文雄	三室戸敬光	山本達雄	潮恵之輔	光田健輔	林芳信	挟間茂	廣瀬久忠	宮崎松記	小島の春	林芳信	吉田茂
1	北海道	北海タイムス	○	○	△	○	○	●	●	○	○	×	×	○	○
2	青森県	東奥日報	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		弘前新聞	×	×	○	○	○	○	○	○	○				
3	岩手県	岩手日報	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	●	○	○
4	宮城県	河北新報	×	×	○	●	●	●	●	○	○	○	●	○	○
5	秋田県	秋田魁新報	×	×	●	●	●	●	○	○	○	○	●		
6	山形県	鶴岡日報	所蔵不明のため未確認												
7	福島県	福島民友新聞	○	×	○	○									
		福島民報	○	×	△	○	○	○	○			○	○	○	○

注）表中の●印=番組案内と講演要旨あり。○=番組案内あり △=番組案内あり（題目なし）
×=番組案内なし

表3 1930年代の『北部保養院統計年報』にみる「癩予防デー」の記述（取り組み）

年月日	「癩予防デー」の取り組み内容
1931.6.25	記述なし
1932.6.25	記述なし
1933.6.25	皇太后陛下御誕生日をトし患者慰藉会会則を改正する
1934.6.25	御歌碑を建設し、除幕式を挙げる
1935.6.25	記述なし
1936.6.25	患者親睦会において院西方松丘公園内に「敬仰坤徳碑」を建設する
1937.6.25	記述なし
1938.6.25	記述なし
1939.6.25	記述なし
1940.6.25	御救恤記念塔を建設し、その拝戴式並に除幕式を院内恩賜館前で挙げる

（出典）松丘保養園『昭和十八年統計年報』（1～18頁）より作成

表4 1930年代の『甲田の裾』にみる「癩予防デー」の記述（取り組み）

年月日	「癩予防デー」の取り組み内容	出典
1931.6.25	中條資俊の秋田での講演「皇太后陛下御誕辰の佳節に当り偲ばるる癩問題」を連載	1931年7～9月号
1932.6.25	記述なし	
1933.6.25	記述なし	
1934.6.25	中條資俊の「我が松丘の昭和九年六月廿五日」を掲載	1934年6月号
1935.6.25	記述なし	
1936.6.25	中條資俊の「癩予防デー 今年の行事に感あり」を掲載／癩予防デー文芸	1936年6月号
1937.6.25	中條資俊の「感激新たなる癩予防デー」と花田末四郎の「癩予防デーに際し御仁慈を偲び奉る」を掲載。その他に川井昭の「癩は不治に非ず」を掲載／中條資俊の「第五回癩予防デーに際して感激を新たにす」を掲載	1937年6月号／7月号
1938.6.25	中條資俊の「大御母の御誕辰を敬仰しまつりて」を掲載	1938年6月号
1939.6.25	中條資俊の「昭和十四年の癩予防デーを迎へて」を掲載／「昭和十四年六月二十五日癩予防デーに於ける癩に関する座談会」	1939年6月号／8～9・11月号
1940.6.25	記述なし	

開催や寄付運動が確認できる。1932.6.25では福島市で同様の運動が継続されている。ラジオ放送では、(JOAK)による光田健輔講演「癩病の予防と根絶」(1931.6.25)と三室戸敬光(癩病根絶期成同盟会長)の講演「国民の保健と癩病」(1932.6.25)はJOHK(仙台)・JOIK(札幌)により中継がなされているが、JOBK(大阪)の林文雄講演「癩を救ふ三つの力」(1932.6.23)は届いていない。

②第2期(1933～35):北部保養院でも確認

(表1参照)できるように、癩予防協会による「癩予防デー」が1933.6.25を中心に予防週間として開始され、中央のラジオ放送が1935年には北海道・東北の全域に到達していく。1933年の予防週間には仙台市で「癩予防の講演映画会」(1933.7.3～4)が太田正雄と中條を講師として開催されている。北部保養院では、患者慰藉会々則の改正と会員増加の取組(1933.6.25)、御歌碑除幕式の挙行(1934.6.25)。特記されることでは、厳寒の冬季に救いを求める患者に対応できない問題の露呈

(1935.12)がある。

③第3期(1936~40):東北道県癩根絶促進期成同盟会が結成(1936.6.25発会式)され、東北新生園の開設(1939)と患家訪問・指導による東北・北海道の「癩根絶」が取り組まれていく。その一方で治療の成果として軽快退院も推進されていく。1936年10月の火災による北部保養院全焼の影響で「無癩」化が停滞し、東北新生園の開設で「無癩」化推進が強化されるという両面が見られる。北部保養院では、恩賜寮落成式が挙行(1940.6.25)されている。

④第4期(1941~45):再建された北部保養院が国立移管(1941.7.1)されて松丘保養園となり、東北新生園と合わせて主に東北・北海道の「無癩」化の徹底(強制収容)がめざされ、1943年には青森県と福島県が「無癩県」として表彰されている。一方、「甲田の裾」1941年9月号には、本庄繁(軍事保護院総裁、陸軍大将)の講演記録「全治への希望」が掲載される。

5. まとめと今後の課題

以上に見た中條の主張は、隔離主義批判の代表で知られる小笠原登、太田正雄、青木大勇をはじめ、上川豊、竹内勅、志賀潔らと同様の考え方(=治療解放主義)の系譜に位置づくと言える。

中條は、1930.8.9の皇太后陛下の「御沙汰」を、翌日の「東京朝日新聞」等が「不治の病に悩む悲惨な癩病患者…」と報じている「不治の病」という認識に抗して、その「根治療法」の発見・開発に尽力した。また世間のらい病観の改善や社会復帰の支援にも意を払った。中條の存在(生き方)とその治療解放主義の「救癩」思想は、様々な制約による限界(治療の犠牲者も含む)を持ちつつも、石館守三(国産プロミン合成者)に「癩」治療への関心を喚起し、「根治療法」の発見に道を拓いていった点で、歴史的意義を有している。もし上記した中條らの治療解放主義が「救癩(癩予防)」運動において主導権を発揮することができれば別の可能性が拓かれたといえる³⁾。

今後の課題は、①未調査の東北・北海道の地方新聞調査を通して表2の完成度を高めること、②東北道県癩根絶促進期成同盟会の解明と東北新生園の調査・検討、③1940年代前半の東北・北海道における「無癩県運動」の実態の解明(特に1943年に青森・福島両県が無癩県になる強制収容の過程の解明)、④さらに言えば「療養所内同胞の覚醒」と「救癩」運動(→十坪住宅運動・無らい県

運動)との関係、などである。

<注>

1) 筆者のハンセン病問題史研究(単著)の成果は、下記のとおりである。そのうち「らい予防デー」に関する研究成果は、主に⑨⑩⑫⑭⑰である。

①拙稿(2009a):1920年代の台湾におけるハンセン病問題に関する研究「研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集—」第2巻第2号,1~11,2009年3月

②拙稿(2009b):日本ハンセン病社会事業史研究(第1報)—1922年のディーン博士の来日とその治療解放主義の影響の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第73号,31~42頁,2009年3月

③拙稿(2009c):「日本MTL(日本救癩協会)と機関誌『日本MTL(楓の蔭)』(『近現代日本ハンセン病問題資料集成(補巻16~19)解説・総目次・索引』所収)不二出版,5-17頁,2009年5月

④拙稿(2010):日本ハンセン病社会事業史研究(第2報)—民間の隔離主義運動の成立・展開過程の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第74号,1~15頁,2010年3月

⑤拙稿(2011):日本ハンセン病社会事業史研究(第3報)—治療解放主義の系譜(楽生病院)の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第75号,25-34頁,2011年3月

⑥拙稿(2012):日本ハンセン病社会事業史研究(第4報)—治療解放主義の形成と軽快退院問題の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第76号,31-41頁,2012年3月

⑦拙稿(2013):日本ハンセン病社会事業史研究(第5報)—1920年代における希望社のハンセン病救済運動の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第77号,35~50頁,2013年3月

⑧拙稿(2014):日本ハンセン病社会事業史研究(第6報)—希望社地方支部のハンセン病救済運動と十坪住宅の成立—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第78号,pp.41~48,2014年3月

⑨拙稿(2015):日本ハンセン病社会事業史研究(第7報)—希望社のハンセン病救済運動と「らい予防デー」の成立—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第79号,pp.65~76,

2015年3月

- ⑩拙稿(2016a)：日本ハンセン病社会事業史研究(第8報)―「らい予防デー」の成立過程の検討―「長崎大学教育学部紀要―教育科学―」第80号,pp.57~65,2016年3月
 - ⑪拙稿(2016b)：九州における希望社運動の研究―希望社九州聯盟の検討を中心に―「九州教育学会研究紀要」第43巻 pp.65~72,2016年8月
 - ⑫拙稿(2017)：日本ハンセン病社会事業史研究(第9報)―ラジオ放送に見る「らい予防デー」の展開過程の検討―「長崎大学教育学部紀要―教育科学―」第81号,pp.121~130,2017年3月
 - ⑬拙稿(2018a)：岩下壯一とハンセン病―祖国浄化論の検討―「長崎大学教育学部紀要―教育科学―」第82号,pp.73~85,2018年2月
 - ⑭拙稿(2018b)：1930年代の東京におけるハンセン病救済運動と「らい予防デー」『東京社会福祉史研究』第12号,pp.47~57,2018年5月
 - ⑮拙稿(2019)：後藤静香とハンセン病「長崎大学教育学部紀要―教育科学―」第83号,pp.73~85,2019年3月
 - ⑯拙稿(2020)：1920年代の朝鮮におけるハンセン病問題に関する研究―志賀潔における治療主義と隔離主義の相克―「長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要」19巻1号,pp.73~86,2020年12月
 - ⑰拙稿(2021)：1930年代の台湾におけるハンセン病問題に関する研究―「らい予防デー」の成立・展開過程の検討を中心に―「鎮西学院大学現代社会学部紀要」20巻1号,pp.73~87,2021年12月
- 2) 後藤静香が提起の「運命を感謝する」という「最上」の境地は、注1)~⑭の拙稿(2018b)で解明に着手した林文雄のいう「療養所内同胞の覚醒」(「三つの力」のひとつ)に関係している。林文雄は、『悲惨のどん底』で「日本国民に訴ふ」(1930.6.6付)を執筆し、さらに「日本MTL」第13号(1931.3)で玉木愛子の「癩者の祈りと感謝」(5~6頁)を紹介している。これらの「療養所内同胞の覚醒」が後藤に影響していると考えられる。
- 3) この筆者の認識(中條評価)の成否を確かめるため、2015年9月2日・3日と2016年2月2日・3日の4回にわたり松丘保養園の入所者・

滝田十和男氏から聞き取り調査を行った。その聞き取り内容の全文は、基盤研究(c)(一般)平成27~30年度研究成果報告書『療養所入所者からみたハンセン病(らい)法制史』(課題番号15K03164 研究代表者 和田謙一郎 2019年2月発行 全215頁)の139~210頁に収録されている。特に下記に示す聞き取り結果(205頁)に見るように筆者の中條評価を滝田氏は否定された。

「平田：そういう発想を中條園長は持っていたと
思っているんですが。

滝田：中條園長は、そういう、あの、開放的な療養所ってことは全然考えなかったね。みんな、あの閉鎖的というか、強制隔離そのままの時代からそのまま踏襲してきたし、療養所っていうものはこういうものだって思わせてしまったからね。ええ。

平田：書いているものを見ると、社会復帰のための保護施設を作るべきだとあるんですよ。

滝田：ええ。中條園長。

平田：東北には社会復帰前の中間施設を作る流れが。

滝田：あー、それ見たことないけどねー(後略)本稿の2.で検討した考え方、特に巻頭言(c)を念頭においた筆者の聞き取りに対し「それ見たことない」との返答を受けて、次回実物資料をいろいろお見せして再度聞き取りをする予定であったが、残念ながら2016年8月17日に91歳で永眠された。貴重な証言をしていただいたことに心から感謝し、ここに哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りしたい。筆者の中條評価は未解決のまま残された。

(付記)本研究は、社会事業史学会第44回大会(2016年5月14日、於・石巻専修大学)において発表した「1930年代のハンセン病社会事業に関する研究(第3報)―北海道・東北地方における「らい予防デー」と北部保養院(中條資俊)の役割の検討―」(『社会事業史学会第44回大会報告要旨集』42~43頁)を改題し、当日発表資料を若干修正・加筆してまとめたものである。さらなる資料発掘と補強が必要であるが、コロナ禍の制約により果たせなかったことを遺憾とする。他日を期したい。

